

## 第 61 回国際理解・国際協力のための全国中学生の作文コンテスト東京都大会 特賞原稿 1

足立区立西新井中学校

青柳 美空

### 課題③

もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決し、どんな世界にしていきたいか。

### 副題

「当たり前」のことができるなら

中学一年生、一学期の期末考査、私は「SDG s」を知らなかったため、技術のテストで大失敗をしてしまいました。後日気になって調べたところ、それは地球規模の問題の解決のために、国際連合が 2030 年までに達成を目指している国際目標だということが分かりました。その 17 の目標の中で、私は目標 4 の「すべての人への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」というのが気になりました。学校で勉強することは日本では当たり前のことです。しかし「当たり前のこと」という認識のせいか、私の周りの友達に勉強をめんどうくさがって嫌っている人が多く、実際私もあまり勉強が好きではありませんでした。けれど最近、世界には学校に行けずに働いている子どもが 1 億 5200 万人もいることを知り、それはおかしいことだと思いました。自分の生まれた国や家によって勉強の機会が平等でないというような理不尽なことはあってはいけません。だから、私がもし世界の問題を一つ解決できるとしたら、そういった教育の不平等をなくし、全ての人々が学校に行き、自分の思うように勉強ができる世界にしたいです。

世界の現状について調べる内に、私は中村哲さんという人を知りました。中村さんはもともと医師としてアフガニスタンへ派遣されたのですが、病人の病気を治すことより、用水路をつくって水を使えるようにすることの方がその土地の人々にとって大切だと思い、「百の診療所より、一本の用水路を」をモットーにアフガニスタンの人々と用水路を造ったそうです。2003 年に始まったその工事は 2010 年に完成し、砂漠化していたその土地を田畑で農業ができる豊かな土地に変えました。私はそのことを知って、なぜお金の寄付や、技術者の派遣ではなく、自らそこに住んで現地の人々と共に作業をしたのだろう、と疑問に思いました。ある講演で彼はこんなことを言っていました。「募金をしたり、技術者を派遣したりしても、貧しい人々は、お金を何に利用すれば良いか、自分たちでその技術をどのように活用すれば良いかわからない。だから自分たちで用水路を造り、それによって豊かになった土地で農耕を行っていくなどと、自らの知恵や力で生きられるようにならなければいけない。」この中村さんの考え方は、SDG s の目標の達成へつながっていると思います。

かつて貧困に困っていても、それを乗り越える知識とその知識を生かして実行する行動力があれば、将来仕事につき、安定した暮らしを送れるようになります。ただその知識や行動力を

手に入れるには、やはり質の良い教育が必要です。もし4の目標の全ての人々が教育を受けられるようにする、ということを達成できれば、貧しい国が豊かな国に変わっていき、やがて世界の貧困や飢餓などの問題が解決し、SDGsの全ての目標を達成できるはずですが、しかしその達成には、日本などの先進国や、国際連合などの組織のもっと積極的な支援が必要です。ただ、その支援はお金ではいけません。最善の支援とは、質の良い教育を少しでも多くの人々が受けられるようにし、自分の知恵を生かして自分の力で生きていけるようにすることだと思います。本質的な問題の解決に向けて、よりその国のためになることをすることが真の支援ではないでしょうか。また、発展国の人々はもっと世界のことについて知るべきです。一年前の私はSDGsさえ分かりませんでした、それではいけないんだということが世界の問題を考えることで分かりました。日本のような「当たり前のこと」を当たり前でできる国には「当たり前のこと」が当たり前でない国を助ける義務があります。だから私は、これからもっと世界のことについて学び、世界中の人が幸せに生きていけるようにするにはどうすれば良いのかを考え、行動していきたいと思っています。